令和４年度

白浜町埋蔵文化財調査年報

２０２３

白 浜 町 教 育 委 員 会

序　　文

白浜町は、町内各地に貴重な歴史的遺産を多くのこしています。そのなかでも日置川流域を中心に活躍していた水軍領主の安宅氏がのこした城跡群は、非常に状態が良く、また様々な点において貴重な資料となっています。令和2年3月10日付で、安宅氏居館跡、八幡山城跡、中山城跡、土井城跡、要害山城跡の5城が、安宅氏城館跡として国史跡に指定されました。

その安宅氏城館跡の追加指定を目的とする調査を、今年度より2カ年をかけて実施する予定となっております。令和4年度においては、勝山城跡の発掘調査を実施いたしました。発掘調査では、虎口や土塁に関連する遺構が良好に遺存していることがわかりました。本書は、概要報告に留まりますが、今後より詳細な調査・検討を重ね、追加指定に向けた報告書を作成したいと考えております。

今回、ご協力を賜りました土地所有者の皆様をはじめとした多くの方々に感謝申し上げますとともに、ご指導を頂きました史跡安宅氏城館跡保存活用指導委員会・文化庁・和歌山県教育委員会文化遺産課の方々に心から厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後も安宅氏城館跡の内容確認調査を進めるとともに、町内各地域に残る歴史的遺産の調査、保存、活用を考えておりますのでご支援賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月31日

白浜町教育委員会

教育長　　豊田　昭裕

例　　　言

１．本書は、令和 4 年度における白浜町教育委員会が実施した埋蔵文化財関連事業をまとめたものである。一部、令和 3 年度の調査成果を含むものとする。

２．調査については、国宝重要文化財等保存整備費補助金及び和歌山県文化財保護費補助金の交付を受けて、実施した。

３．現地調査は、史跡安宅氏城館跡保存活用指導委員会並びに和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課の指導を受けて、白浜町教育委員会がおこなった。

４．本書の執筆・編集は、佐藤純一がおこなった。

５．土層等の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 2006 年版』による。

６．発掘調査及び整理業務にあたっては、地元区・地権者をはじめ関係機関の協力を得た。調査参加者は、以下のとおりである。木戸孝（敬称略）

７．調査･整理作業で作成した図面･写真及び台帳等の記録資料並びに出土遺物は、白浜町教育委員会が保管している。図面中の方位は特に断りがないかぎり、磁北をさす。なお、本書所収の調査成果については、今後の本報告書刊行をもって正式報告とする。

目　　　次

序　文　　　　　白浜町教育委員会　教育長　豊田昭裕
例　言

白浜町の位置と環境･･1
Ⅰ　白浜町内遺跡発掘調査等事業･･3
　　1．藤島貝塚遺跡（2021-6）･･5
　　2．勝山城跡（2022-1）･･･7

Ⅱ　文化財普及啓発事業･･･11

1　白浜町の位置と環境

白浜町は和歌山県の南部に位置し、大きくは田辺湾沿岸の一部をなす半島地域と紀南では随一の平野を誇る富田川流域及び清流との誉れ高い日置川流域に分けられる。

図１　白浜町位置図

面積は、201.10 平方キロメートルで、県全体の約 4.3%を占めることとなる。年間平均気温は 17.1℃、年間降水量は 1,780 ㎜、年間日照時間は 2,047 時間となっており、気候は温暖で明るく過ごしやすい。森林が全体面積の約 81.4%を占め、北西の半島部に市街地が形成され、南部では海岸地域まで山地がせまり、海岸、河川流域、谷間部に集落が点在している。町域には、吉野熊野国立公園、大塔日置川県立自然公園が含まれるなど、海・山・川にわたる豊かな自然環境に恵まれた地域である。

白浜町において旧石器時代に遡る遺跡は、これまでのところ確認されていない。草創期に属する有舌尖頭器が十九渕遺跡から出土しており、縄文時代草創期から生活の痕跡が確認できる。縄文時代の代表的な遺跡である天狗谷遺跡では、条痕文土器から突帯文土器に至る数多くの遺物が採集されている。このように、草創期以降から晩期にいたるまで生活が営まれていたことが判明している。日置川流域でもっとも時期が遡る遺跡は、日置川の河口近くの右岸丘陵先端部に位置する大古Ⅰ遺跡である。出土遺物としては、縄文時代前期末の大歳山式、中期初頭の鷹島式をはじめ、後期前半の中津式・北白川上層式、後期中頃の元住吉山式など幅広い時期の土器が出土している。

弥生時代を通して遺跡の確認数が少なく、半島地域と富田川流域では、瀬戸遺跡、田尻浜遺跡、端田峠遺跡で前期から後期の遺物が確認されているのみである。このことは、平野が発達しない地形環境が影響している可能性も考えられる。しかし、富田川河口近くの中地区から、扁平鉦四区袈裟襷文銅鐸が出土している。また弥生時代後期末以降、瀬戸遺跡、田尻浜遺跡、阪田山遺跡など町内各地で、遺物の確認例が増加する。瀬戸遺跡をはじめとする海岸部に位置する遺跡では、製塩土器が多数確認されており、田辺湾沿岸を中心とした地域で製塩が行われていたことが判明している。日置川流域に所在する安宅遺跡では、昭和 50 年（1975）の発掘調査で弥生時代後期～古墳時代初頭頃の高杯、甕、鉢などとともに竪穴住居が検出されている。また、平成 21 年度から平成 22 年度に行われた近畿自動車道紀勢線建設工事に伴う発掘調査では、大古Ⅱ遺跡で弥生時代の遺構が確認されている。

古墳時代の白浜町では、古墳と岩陰墓が共存している。白浜半島や富田平野の安久川河口部において、古墳が集中して築かれ、とくに権現平古墳群は本州で最南端に位置する群

集墳として位置付けられる。また、脇ノ谷古墳は墳丘を持たない埋葬施設として捉えられ、盗掘を受けていない石棺墓として貴重である。海岸部にみられる岩陰墓（自然洞穴や岩陰の中に石棺や土壙墓などの埋葬施設）は、代表的なものとして綱不知岩陰遺跡が挙げられる。また、阪田山の北斜面に位置する阪田山遺跡では、5 世紀後半の円形配石遺構の中から、玉や剣といった滑石製模造品が出土しており、祭祀遺跡であると考えられている。古墳時代の集落遺跡については判然としない。

古代には牟婁郡がおかれ、白浜町域では牟婁郷・岡田郷が比定されている。当地は奈良時代から湯治場として、古くからその名を知られているにもかかわらず、具体的な様相がわかる資料は少ない。瀬戸遺跡では奈良～平安時代の製塩炉が検出されており、引き続き製塩を行っている状況が把握できる。

院政期に入り熊野詣は急激に盛んになり、白河、鳥羽、後白河、後鳥羽上皇らは院政四代に渡り、約 100 年間に 100 回近い「熊野御幸」を行った。そうしたなか熊野別当家は、たび重なる御幸にともなう熊野三山の神威の拡大を背景に、熊野三山に通じる牟婁郡の要衝を抑えた。また富田の地も別当家が占有し、その配下となった。実態は不明であるが、安宅荘もこの頃に成立していたとみられる。

鎌倉時代において、安宅荘は那智山領として把握され、その後関東成敗地として執権北条氏（得宗家）の影響が強かったことが後嵯峨上皇の院宣から明らかになっている。南北朝期における富田川流域及びその周辺のことは詳しく知ることはできないが、南朝方として活躍した櫟原荘市ノ瀬を中心とする地域を支配していた山本氏や安宅荘の安宅氏などの記録が散見される。室町時代には紀南地方も群雄割拠の状態となり、富田川流域にも湯河氏、山本氏、安宅氏、周参見氏などが存在した。応仁の乱前後から富田川流域でも龍松山城の合戦、鴻巣城の合戦などの記録が残っているように、山本氏と安宅氏、小山氏などがたびたび攻防を繰り広げている。安宅氏城館跡の山城は、この時代以降に築かれたものがほとんどである。

近世においては、日置川は主に材木の舟運として利用され、その利用はおそらく中世に遡り、大正時代中頃まで続いた。河口に位置する出月宮は、広く海岸沿いに信仰を集めていた。富田川河口に位置する富田浦は、江戸時代に菱垣廻船発祥の地として知られ、海運の拠点となっていたようである。具体的な史料は残されていないものの、富田浦にあたる中地区では近世期に遡る可能性のある建造物や長大な船小屋が今に残されている。

熊野参詣の様相も変化し、それまでの中辺路ルートとは異なる海沿いを通る大辺路ルートが利用されるようになる。後世に「文人墨客の道」と呼ばれるように、名だたる文人が紀行文などでその様子を伝えている。海と山を縫う街道の景観に、当時の文人は惹かれたのだろう。また、白浜半島部では「湯崎七湯」と呼ばれる外湯を中心に湯治が盛んとなり、田辺や遠く四国から船で訪れる客もいた。湯治客は 1 か月以上も滞在し、南紀白浜の景勝地を巡ることを楽しんでいたようだ。現在「湯崎七湯」のうち「崎ノ湯」のみ当時のままの湯壺となっており、荒磯の岩盤という野趣あふれる温泉を楽しむことができる。

Ⅰ　白浜町内遺跡発掘調査等事業

令和 4 年度中の白浜町内の埋蔵文化財包蔵地における届出及び発掘調査(確認調査・立会調査を含む)は、表 1 に挙げたとおりである。

本町においては、届出件数自体が減少傾向である。年間数件程度であり、10 件を超えることはまずない。開発原因としては、宿泊施設（グランピング）建設や電柱設置が挙げられる。いずれも工事内容や過去の調査成果から、埋蔵文化財包蔵地に与える影響はほとんどないものと考えられ、本発掘調査に至っていない。

開発原因以外の調査として、令和 2 年 3 月 10 日付で史跡指定された史跡安宅氏城館跡の追加指定を目的とした範囲内容確認調査を実施している。重要遺跡確認調査の一環として、今年度は勝山城跡の確認調査を実施した。

表 1　令和 4 年度　白浜町内発掘届　一覧表

No.	遺跡名	調査地住所	工事の概要	種別	取扱内容	対象面積	届出日	調査成果
1	藤島貝塚遺跡	白浜町堅田 2366-3	グランピング施設建設	届出	工事立会	約 10 ㎡	R4.1.25	本書収録 (2021-6)
2	勝山城跡	白浜町塩野 489 番地　他	範囲内容確認	報告	確認調査	約 60 ㎡	R5.1.17	本書収録 (2022-1)
3	裏の地遺跡	白浜町才野 1686-2	電柱設置	届出	工事立会	約 1 ㎡	R5.1.31	― (2022-2)

註）No.1（藤島貝塚遺跡）については、令和 3 年度中の届出であるが、立会調査の実施が令和 4 年度であったため、本書に所収する。

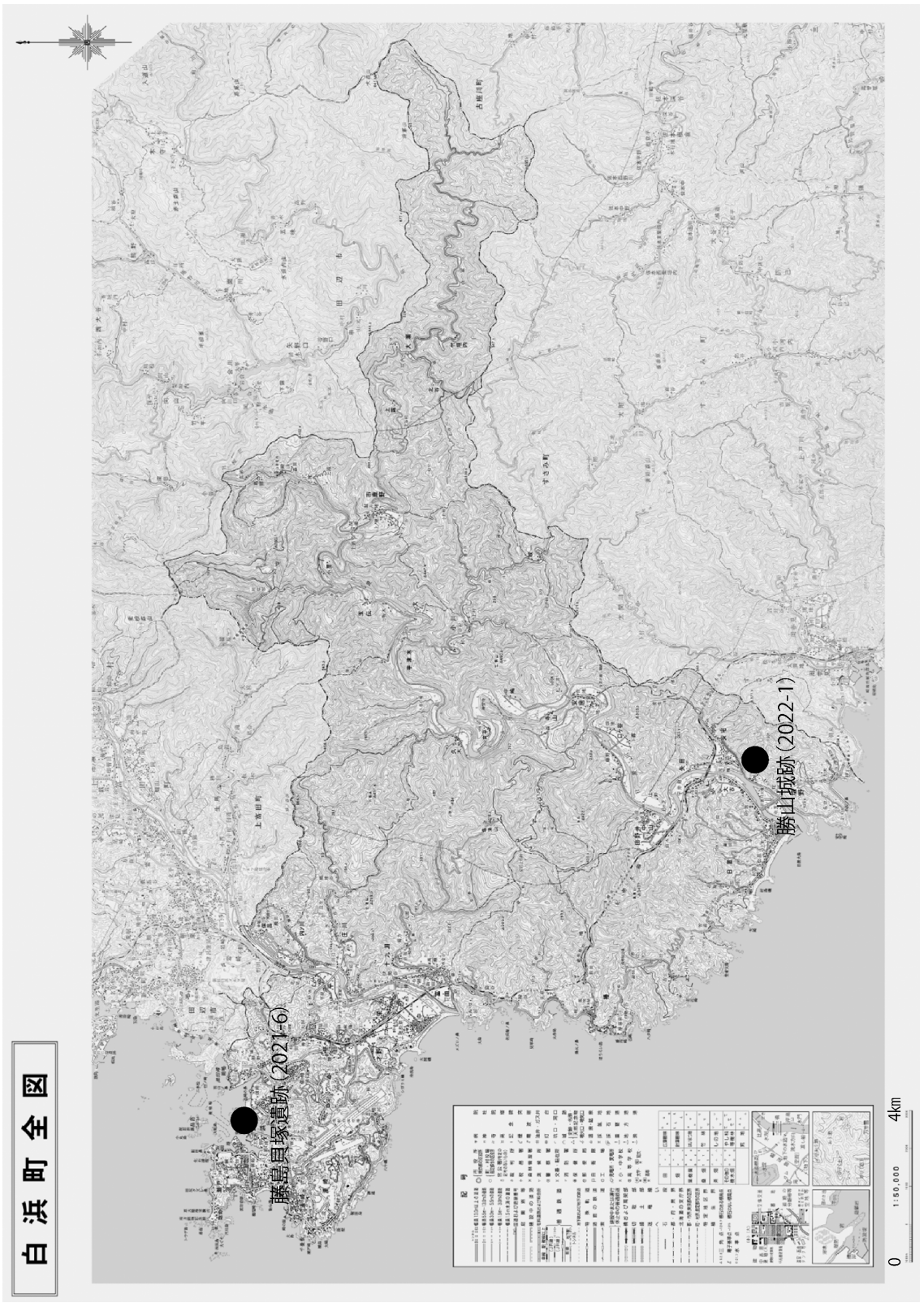


図２　本書所収遺跡位置図

１.藤島貝塚遺跡(2021-6)

所 在 地：白浜町堅田 2366－3
事業主体：民間業者
工事目的：グランピング施設建設
調査種別：工事立会
調査期間：令和 4 年 3 月 9 日、同年 4 月 13 日

藤島貝塚遺跡は、通称藤島と呼ばれる陸繋島の山裾部に立地する。豊富な貝類（マガキを主体とする）とともに、須恵器・土師器・土錘などが出土した古墳時代の集落跡である（白浜町誌編さん委員会 1986)。しかし、近代以降のたび重なる開発の結果、遺跡の大部分の保存状態はよくないとみられる。

今回の対象地については、事前踏査の結果、現状地形や過去の調査履歴からすでに大規模な造成による削平が予想された。そのため、埋蔵文化財包蔵地範囲内に位置し、掘削深度が造成範囲を超える可能性が高い浄化槽設置関連工事時に立会調査をすることとなった。

調査の結果、想定のとおり大半がぶ厚い造成土で覆われており、山裾側のみに薄く遺物包含層が確認される程度であった。また、地表下より造成土を挟んで、1mの地点で岩盤が露出することから、遺構が展開する可能性がほとんどなく、慎重工事の指示をおこなった。

なお、埋蔵文化財包蔵地外における給排水設備工事の立会により、古墳時代の土師器、須恵器や貝類が出土する小規模な遺物包含層が確認されたものの、明確な遺構は検出されなかった。土器はすべて細片で、図化に耐えないものである。また、この遺物包含層については幅 1m程度しか遺存せず、延長部分については造成時に削平されたとみられる。位置は、造成地と海岸との境目に位置し、山裾部から海岸にかけて、当初は埋蔵文化財が展開していたが、前述のとおり近代以降の開発行為により、現在ではほとんど残らない。ただし、開発範囲外となる山裾により近い地点については、造成の影響が少なく埋蔵文化財が展開する可能性が高いため、今後の開発時には注意が必要である。

なお、本遺跡の南、約 400ｍ地点の海岸沿いにも、古墳時代中～後期を中心とする日向浦遺跡が存在し、鹿角製の銛頭や釣針、須恵器、土師器等の土器類が出土している。藤島貝塚遺跡についても、田辺湾沿岸の遺跡と軌を一にした遺跡の動向が想定される（田中 2018)。

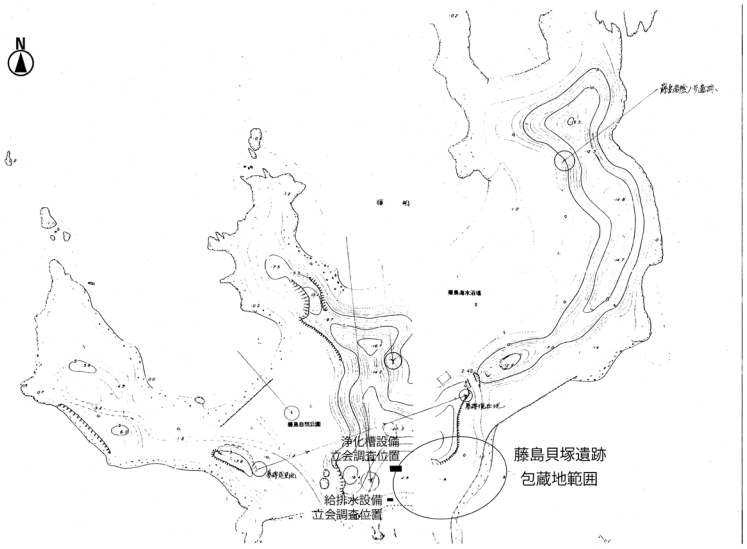


図 3　藤島貝塚遺跡　調査位置図

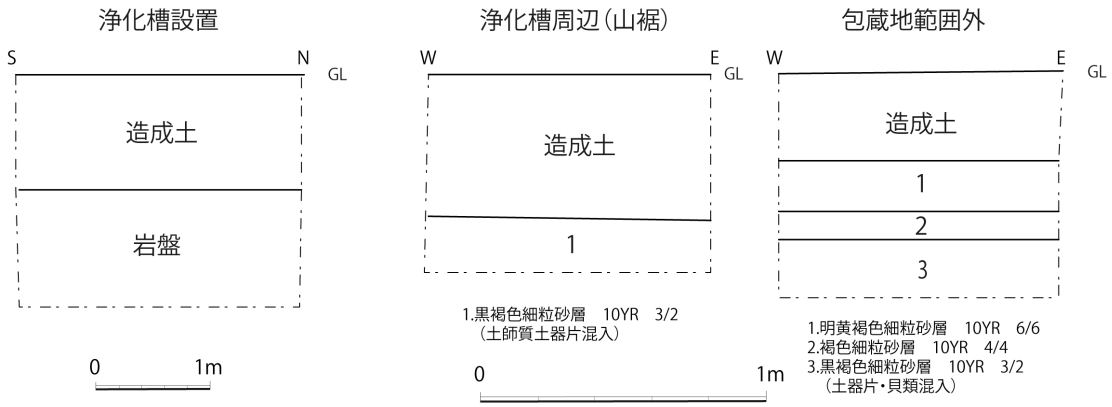
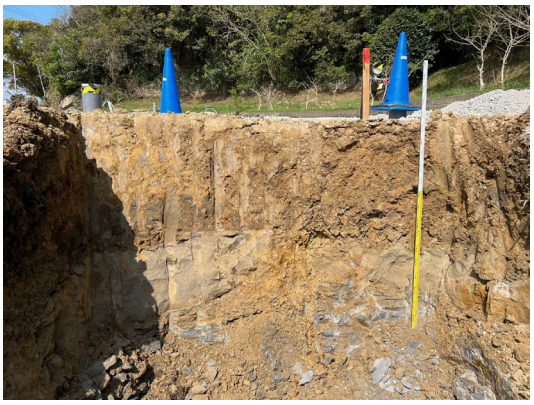


図 4　藤島貝塚遺跡　断面模式図



①浄化槽設置場所　断面

②浄化槽関連場所（山裾）　断面

③藤島貝塚遺跡　全景

④包蔵地範囲外（給排水設備）　断面

⑤包蔵地範囲外（給排水設備）3 層出土遺物

⑥包蔵地範囲外（給排水設備）3 層出土土器

写真 1　藤島貝塚遺跡　関連写真

２.勝山城跡(2022-1)

所 在 地：白浜町塩野 489 番地　他
事業主体：白浜町教育委員会
調査目的：範囲内容確認
調査種別：発掘調査
調査期間：令和 5 年 1 月 17 日～令和 5 年 3 月 31 日

1. はじめに

標高 212mの高所に位置し、安宅荘だけでなく海上も望める場所に位置する。東の尾根上には、すさみ方面からの侵攻を意識して、岩盤を掘り削った堀切・竪堀で防御している。この防御施設は麓からも遠望できるもので、安宅の湊に出入りする船舶に安宅氏の権力を誇示する目的があったと考えられる。

勝山城跡の全体の規模は、東西約 130m、南北約 110mである。城跡の南側に位置する堀切 1 の全長は、約 35m、堀切 2 は約 40m、堀切 3 は約 53m、堀切 1 と堀切 3 の比高は約 10mもあり、威圧感を感じさせている。城跡の規模と比較すると、曲輪の面積は狭小で、曲輪 1 は東西約 10m、南北約 23mとなる。平面形はやや細長の台形状を呈し、周囲には土塁が巡っている。この曲輪 1 からは、安宅氏居館跡、湊伝承地、八幡山城跡、大野城跡、中山城跡、土井城跡など安宅荘の城跡の多くを眼下に収める。

曲輪 2 は曲輪 1 の南側に位置し、東西約 13m、南北約 25mの規模となる。曲輪 1 との比高は、約 5mある。曲輪の周囲を土塁が巡っているが、東側の一部が切れて平入りの虎口となっている。曲輪内部には平石が散乱しているが、これらは土塁周辺にも用いられており、必ずしも礎石建物が存在したとは断言できない。東の尾根状には、5 本の連続堀切が連綿と築かれている。堀切 4 の全長は約 12m、堀切 5 は約 13m、堀切 6 は約 15m、堀切 7 は約 23m、堀切 8 は約 42mとなる。城跡中心部に近いほど、堀切の規模が大きくなっている。

連続堀切の土塁には、補強のためと考えられる石積みが施されている。これらは安宅荘の城跡に共通する築城技法であり、大向出城跡でも確認されている。岩盤を掘削した際に出土した岩を堀の内側に積むなど、労働力を投入して築いた山城である。今回の調査が実施されるまでは、表採資料が確認されていないため、時期比定は難しかったが、ほかの安宅氏城館跡の山城と同時期に機能していたと考えられてきた。

2. 調査の概要

令和 5 年 1 月 17 日から令和 5 年 3 月 31 日にかけて調査を実施した。トレンチの設定については、曲輪 1、曲輪 2 に 1～6 トレンチまで設定した。また土塁部分については断割を行い、構造把握につとめた。遺跡の立地上重機の搬入は困難であったため、全て人力掘削により調査をすすめた。総調査面積は、約 60 ㎡となる。

基本層序は、1 層（表土・腐食土層）、2 層（明黄褐色細粒砂層（10YR7/6））、3 層（明黄褐色細粒砂層（10YR6/8））が堆積する。2 層は、地山由来の大ぶりな礫が多量に含まれる自然堆積層であり、ほとんど遺物を含まない。3 層は、岩盤直上の地山ベース層となる。1～2 トレンチは、曲輪内部の状況確認、3～6 トレンチは曲輪 2 の虎口や土塁の構造把握のために設定した。

【1 トレンチ】

1 トレンチは、曲輪 1 の中央部に 3m×2m で設定したトレンチである。2 層より本調査での唯一の出土遺物である青磁碗破片が出土している。明確な遺構は確認できない。土塁側に向けて、トレンチを拡張した。土塁天端部、裾部のともに、石積みや柱穴といった遺構は検出されなかった。地表下 15 ㎝から岩盤が露出する。

【2 トレンチ】

2 トレンチは、曲輪 2 の平坦面の北側に 3m×2m で設定したトレンチである。1 トレンチと同じく基本層序どおりの堆積であり、遺構・遺物ともに確認されなかった。地表下 10 ㎝から岩盤が露出する。

【3 トレンチ】

3 トレンチからは、石組階段が検出された。以前より、最上段の石組は露出しており、その下部の構造を把握するために、設定した。当初は、土塁に直交する幅 2m のトレンチを設定したが、石段を続かなかった。その後、転落石を除去しながら、一部トレンチを拡幅すると、斜めに石組が延長することがわかった。根かく乱のため、一部崩落しているが、最上段より 5 段目までと最下段が残存している。

おそらく 10～11 段程度の 1 段 2 石の板石を並べた石組階段が復元できる。石段が斜行する理由は、土塁の傾斜がきついことが一因と考えられるが、さらに検討が必要である。

【4 トレンチ】

虎口において、門に伴うと想定される礎石（2 石）が検出された。その周囲には、原位置を移動しているものの、同様の礎石が立木に押し出されるような形で遺存しており、4 本の柱による門が想定される。現存する礎石は北西方向に軸をもつ。現存する礎石間は、約 180 ㎝（6 尺）となる。門外側は、通路状となり北側へ斜め下に向けて延長するとみられる。

【5 トレンチ】

曲輪 2 南端の土塁は、天端部が約 3m と幅広く造成されており、土塁の構造を把握するためトレンチを 5m×1m で設定した。土塁内側は、曲輪の平坦面確保及び土塁の補強目的に 3 段の石積みが施されている。天端部では、トレンチ拡張部分で、土塁の形状に沿う形で柱穴が 4 基検出された。これらは、柵列と考えられる。

また、柵列の外側に、北西方向に長軸をもつ掘立柱建物が検出されている。土塁上の構造物であり、三重堀切を見下ろし、また海上まで望見できる位置にあることから、簡易的な物見台（櫓）としての役割を担ったと推測される。

【6 トレンチ】

虎口横（4tr 北側）に設定した。こちらの土塁上からも柱穴跡が検出された。この柵列は、門礎石控柱側から延長している状況が確認される。

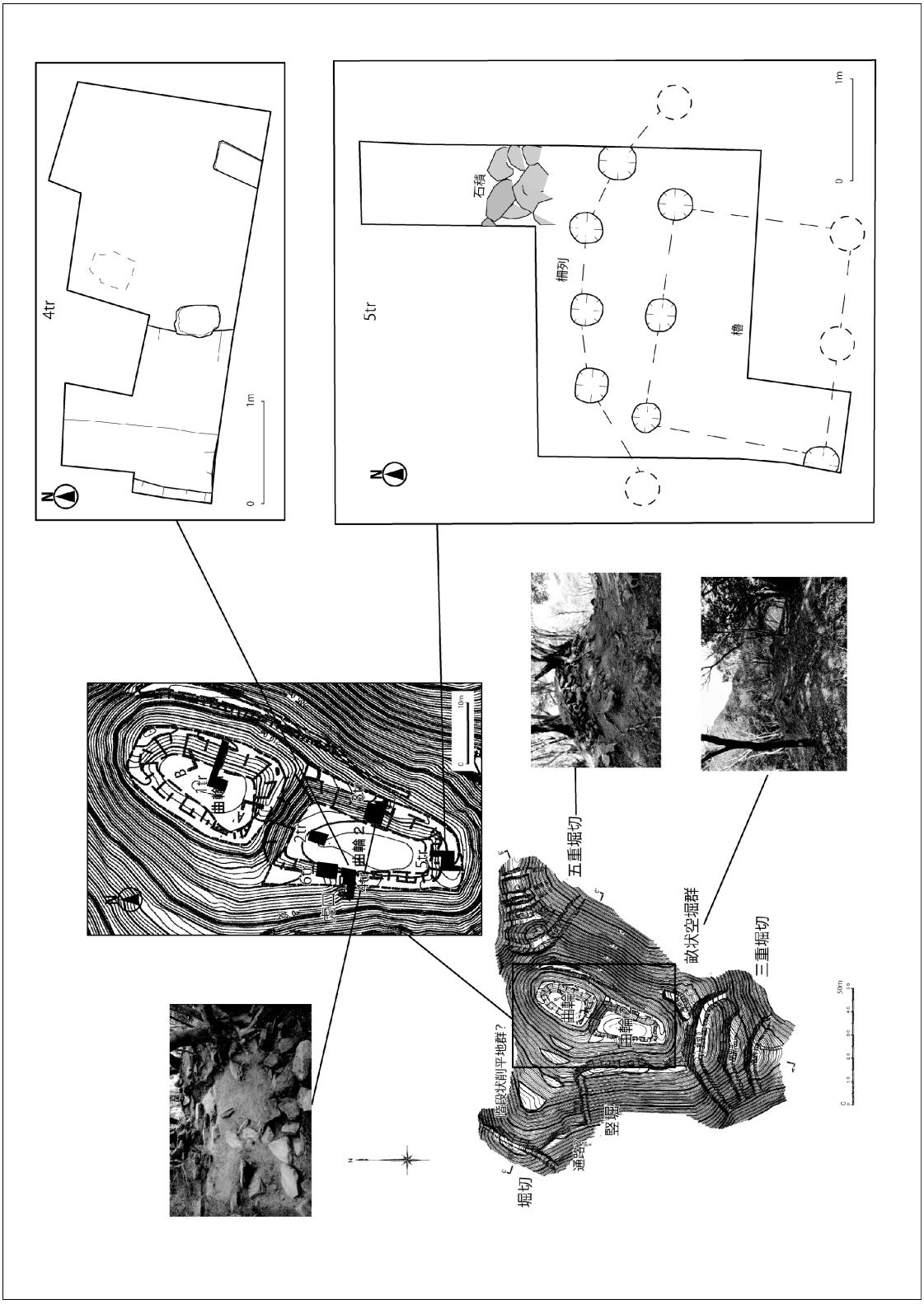


図 5　勝山城跡トレンチ配置図

3. 出土遺物

1 トレンチより青磁波状文碗の口縁部片が 1 点出土している。投弾用と想定される小振りな川原石を除けば、唯一の遺物である。もちろん調査面積に差があるため、単純に比較するわけにはいかないが、これまで発掘調査が実施されてきた安宅氏城館跡の山城（八幡山城跡、要害山城跡、中山城跡）と比べて極端に少ない。

青磁波状文碗は、残存高 3.2 ㎝であり、あおみがかった灰白色（10Y 8/1）を呈する。口縁部に波状文が 4 条施され、その下部に蓮弁が便化した縦横線が明瞭である。上田編年 C-Ⅲ類（上田 1982）、柴田編年や国立歴史民俗博物館報告の C-3 類に該当する（柴田 2011、池谷ほか 2021）。これらは、16 世紀前半から後半にかけて出土する一群と捉えられる。

写真 2　青磁波状文碗

なお、勝山城跡は安宅南要害に比定され、「安宅南要害敵取懸」から始まる畠山尚慶（尚順）書状［久木小山家文書 137］の時期は、明応 6 年（1497）から永正 13 年（1516）頃とされる（弓倉 2021）。本史料から勝山城跡が機能していた時期を積極的に評価するならば、勝山城跡出土の青磁碗については、16 世紀前半に比定される可能性がある。勝山城跡は、出土遺物の僅少さから恒常的な利用ではなく、より短期間かつ戦乱に対応した山城と評価できる。

《引用・参考文献》

上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2
池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎 2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 226 集
柴田圭子 2011「第Ⅴ章第 1 章今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究（1）」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅴ』今帰仁村教育委員会
白浜町誌編さん委員会 1986『白浜町誌』本編上巻
白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会 2014『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』
田中元浩 2018「和歌山県白浜町日向浦遺跡（貝殻畠貝塚）出土資料－浦宏氏収集資料の図化成果（その 2）－」『紀伊考古学研究』第 21 号
日置川町誌編さん委員会 2005『日置川町史』第一巻 中世編
弓倉弘年 2021「紀伊守護と紀南の水軍領主」『熊野水軍小山家文書の総合的研究』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第 29 集

Ⅱ　文化財普及啓発事業

１．町内小学校　総合学習

【安宅小学校】

白浜町立安宅小学校 3～6 年生児童 6 名を対象に、文化財についての講義及びフィールドワークをおこない、自らが住んでいる地域の歴史や身近な文化財について知り、正しく理解することを通じて、地域を大切にしようとする態度を養うことを目的に総合学習を実施した。

今回の総合学習では、安宅地区にある勝山城跡を中心に、史跡安宅氏城館跡について学んだ。とくに、今年度発掘調査を実施していた勝山城跡について、町学芸員の指導のもと、発掘調査の体験学習を計画した。

講義については、令和 4 年 11 月 7 日に実施し、フィールドワークについては、令和 4 年 11 月 10 日にそれぞれ実施した。さらに、勝山城跡第 1 次調査（本書所収）中の令和 5 年 2 月 2 日安宅小学校の児童及び先生を対象に発掘調査体験を実施した。

①フィールドワーク（堀切）

②（上）フィールドワーク（曲輪 1）
（下）発掘体験（3tr）

写真 3　安宅小学校　総合学習　関連写真

２．勝山城跡　現地説明会

勝山城跡第１次調査にかかる現地説明会を、令和５年３月 11 日に実施した。町内外を問わず延べ 50 名を超える参加があった。さらに、県外からの参加者が 1/3 を占め、勝山城跡をはじめとする安宅氏城館跡に対する関心の高さがみてとれた。とくに遠方からの参加者への周知には、SNS での情報発信が非常に有効であることが改めてわかった。

その反面、地元の方々への周知については、案内ハガキや地元誌への記事掲載といった従来通りの方法が有効であった。これらの成果については、今後の文化財普及啓発イベントでも活かしていきたい。

①勝山城跡現地説明会（1tr）

②勝山城跡現地説明会（曲輪からの眺望）

③勝山城跡 3tr（石段）

④勝山城跡 4tr（虎口　門礎石）

⑤勝山城跡 5tr（石積と柱穴）

⑥勝山城跡 6tr（石積と柱穴）

写真４　勝山城跡　関連写真

報告書抄録

ふりがな	れいわ4ねんど　しらはまちょうないまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	令和4年度　白浜町内埋蔵文化財調査年報
副書名	
シリーズ名	和歌山県西牟婁郡白浜町文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	佐藤純一
編集機関	白浜町教育委員会
所在地	〒649-2211　和歌山県西牟婁郡白浜町1600番地　TEL.0739-43-5830
発行年月日	令和5年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		緯度・経度（世界測地系）	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号				
藤島貝塚遺跡（ふじしまかいづかいせき）	和歌山県西牟婁郡白浜町堅田（わかやまけんにしむろぐんしらはまちょうかたた）	30401	32	北緯 33° 41′ 22″ 東経 135° 21′ 48″	2022.3.9 2022.4.13	約10㎡	立会調査
勝山城跡（かつやましろあと）	和歌山県西牟婁郡白浜町塩野・安宅（わかやまけんにしむろぐんしらはまちょうしおのあたぎ）	30401	14（日置川地区）	北緯 33° 34′ 30″ 東経 135° 27′ 41″	2023.1.17～ 2023.3.31	約60㎡	内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤島貝塚遺跡	貝塚	古墳	—	土師器、須恵器	
勝山城跡	城館跡	中世	柱穴・礎石・石段	青磁	概要報告

和歌山県白浜町
令和４年度　白浜町埋蔵文化財調査年報

令和５年３月３１日

編集発行　白浜町教育委員会
〒649－2211
和歌山県西牟婁郡白浜町 1600 番地
℡　0739（43）5830